



概要

筑後川昇開橋は佐賀県佐賀市（旧諸富町）と福岡県大川市の間を流れる筑後川に架かり、昭和10年5月に旧国鉄佐賀線の鉄橋として開通したわが国最大級の鉄道用可動橋です。この可動橋は、全長506m、中心部が高さ30mの二つの鉄塔に沿って23mの高さまでボタン操作一つでエレベーターのように昇り、開通当時は東洋一の昇開橋でした。しかし、昭和62年3月、佐賀線の廃止とともに鉄道としての役目を静かに終え、現在は、遊歩道の一部として再び活用されています。



架設方法「ポンツーン・エレクション」

大きな煙突やマストを持っている船舶が航行していた筑後川にどのような鉄橋を架けるのか、専門の違う技術者らの研究の結果、可動装置設計による最大800t級の船舶が通過できる「昇開式可動橋」に決まりました。建設現場は筑後川河口から8.5km地点で、流速は最大3m、干満差は最大で3.5mと大きく、さらに有明海沿岸の軟弱地盤でした。昭和7年、工事はまず16本の橋脚の建設作業から始まり、11本の橋脚を川の中に設置す

る必要がありました。しかし軟弱地盤と干満の差が大きく水面が一定でないため基礎工事での掘削作業は困難を極めました。昭和9年から本体工事に着手し、橋桁の架設方法として、足場を組む方法、ケーブルを渡す方法、手延べで架設する方法が検討されましたが、軟弱地盤や流速、橋桁が36mと長いことから採用されませんでした。そこで考えられたのが、干満の差が大きな自然環境を利用して架設する新方法として、橋桁を陸上で組み立て2隻の台船に乗せ、潮が満ちたときに橋脚の上に運び潮が引くと同時に橋脚に設置する方法でした。この方法で架設した橋桁は、鉄塔を支える46.8m橋桁2連、24.2mの可動桁、36.4m橋桁9連の合計12の橋桁で、陸上部は足場をつくって架設しました。昭和9年12月6日早朝、最初に設置する橋桁が準備され、その下には2隻の台船が引き込まれ、橋桁を受け取る作業を待っていました。潮が満ちてきて、台船が橋げたを持ち上げました。潮位が1.8mに上がるのを待って、最初に架設する諸富側から3番目の架設場所へ向けて台船が引き船にひかれゆっくり動き出しました。作業開始から1時間後、ロープと150kgのアンカーを巧みに使い所定の架設位置に備え付け、潮が引くのを待つだけです。1.4mの潮位で橋桁の片側を橋脚に設置、1.1mの潮位でもう片方も設置が完了し、架設作業は終了しました。その後、1日に一つずつ橋桁を設置していきました。鉄塔を支える鉄骨づくりの46.8mの橋桁は、昭和10年1月6日に大川側、20日に諸富側の架設作業が行われました。こうして12連の橋桁架設作業は順調に進み、鉄塔部分は2月に組み立て、3月27日に

は昇開橋の工事が完了しました。この潮位と台船を利用した架設方法は「ポンツーン・エレクション」と呼ばれています。

日本初の昇開式可動橋

重さ48tの可動部は、ボタン一つで操作ができ、ワイヤーで片側（大川側）を巻き上げてつり上げます。可動部の4個のタイヤが鉄塔に設置されたレール（鉄道用レールを転用）に沿って23mの高さまで上昇します。20tのウエイトが両側の鉄塔に下がっていて、機械室側（大川側）の20tの中には、さらに8tの補助ウエイトが取り付けられ、可動部が上昇するときはウエイトが下がり、可動部が下降するときはウエイトが上がる仕組みになっています。橋梁中央部に設置された可動部は長さ24.2mで、レール面から23mのクリアランス（通過可能空間）を確保していて、この可動部の長さで上昇する高さが東洋一といわれています。船舶の通行が優先されていたため、列車の通るとき以外は、可動部を23mの高さまで上げておき列車が通るときにサイレンを鳴らして可動部を下げ、橋には信号機を設置して船舶に通行の可否を知らせていました。

国の重要文化財「筑後川昇開橋」

車社会の到来とともにモータリゼーションの波はしだいに大きくなり、人や物資の輸送は、定期バス、トラック、マイカーへと移り変わっていき減っていき、昭和62年3月27日に佐賀線は廃止となりました。佐賀線の廃止に伴い昇開橋も撤去される方向になりましたが、地元の保存運動により、佐賀線廃止から5年後の平成4年9月17日昇開橋の保存が決まりました。

現在は筑後川昇開橋観光財団が管理を行う遊歩道として地元の観光施設となっており、平成15年5月30日には、国の重要文化財に指定されました。



【参考資料】広報もろどみ（2003年8月，No. 339）

<p>【交通】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・JR長崎本線佐賀駅よりバスで約25分、西鉄天神大牟田線西鉄柳川駅よりバスで約20分 ・九州縦貫自動車道八女ICより車で約30分 ・駐車場なし <p>【探訪コース】</p> <p>歴史と風情が今なお息づく街並み。古き良き時代と、新しい文化の融合する施設。のんびりと散策を楽しめば、訪れた人を暖かく見守ってくれる優しさとの出逢いが望めます。</p> <p>古賀政男記念館・生家、大川中央公園（マンドリン橋）、大川は作曲家古賀政男の出生地です。</p>	<p>一番のお勧めは、主役の筑後川昇開橋ですが、大川・諸富側それぞれのたもとには旧国鉄佐賀線の面影を残した展望公園が整備されています。諸富側には、特産物直売所「もろどみ一番館」が設置され、地元の新鮮野菜・果実、海産物、農産加工品などを購入することができます。</p> <p>【特産品】</p> <p>大川は全国一の家具生産地で、諸富地区とともに箆笥の製造が盛んです。他にも、組子、建具、彫刻、木工芸品の木工製品に加え、手織り職人の技が光る掛川織りも見逃せません。</p> <p>家具を中心とした、職人たちの</p>	<p>伝統の技が冴える街なのです。</p> <p>エツ（有明海のみに生息するカタクチイワシ科の魚）料理、うなぎ料理、有明海の魚介類（ムツゴロウ、ウミタケ、シャコ、クチゾコ、メカジャなど）、有明のり、イチゴ（博多とよのか）等々。</p> <p>有明海から筑後川、豊富な水資源に育まれた大地。その恵みを受けた美味しい料理が自慢です。</p> <p>【問合せ先】</p> <p>筑後川昇開橋観光財団 電話 0944 87 9919 大川市インテリア課 電話 0944 87 2101 佐賀市諸富支所 電話 0952 47 2131</p>
--	--	---